



第四章 「ヒマワリノヨウ」

1

どうも気に入らない。

雪絵は、この何か月かで少しは身に付いた——本を読む——ということをしてしながら、口を尖らせる。

夏の日差しが気温を高める昼下がり。その強い日差しから逃れるように、雪絵は離れの縁側に横になっている。

夏場は革靴よりも足が快適な草履を履いたまま、薄手の着物の裾から足がさらされるのも構わずに、庭の方に投げ出していた。本を持つ手と反対の右腕をぶらぶらと振っている様は、どこか気怠げだ。

(さすがに少しは慣れたけれど、一般的な刀のように軽々とはいかないな)

腕が精彩を欠いているのは、実際に筋肉が疲労しているからだった。程度としては軽いと自分では思っている疲労のある腕は、季節の日差しもあって、結構な熱を帯びている。

着物裾から伸びた両肢の横に並ぶように、長さが1メートル半はありそうな長さの、太く重そうな木の棒が立てかけてあった。

この木刀とも棍棒ともいえるモノは、何を隠そう、雪絵はこの半年近く、通常の刀技の修練に加えて、この鍛錬棒での素振りを自らに課しており、それに使用しているのだ。

既に卓越した刀技を誇る雪絵が、この鍛錬を始めたのには経緯がある。春花いわく。

「これは鹿島神傳直心影流で使われる鍛錬棒でね、使ってみれば分かるけれど、この振り棒くらいの重量なら、血刀を扱う躰を作るのに丁度いいのよ」

と、そんな風に勧められての独り稽古だった。

ちらと、視界の隅の鍛錬棒を見遣る雪絵。その六角の刀身に、決して小さくはない手で握りが余る柄をもつ、木刀というよりも、こん棒や大木槌とって

第四章 太刀の壱

もしいその振り棒は、直心影流の規範通りの、長さ155センチメートル。そして、重さが16キログラムにも及ぶ。打ち刀が抜き身で刀装を含めて1kg前後。野太刀で少なくとも3キログラムはある。

血刀は春花がいうには、野太刀三本分の重量があるという話だから、成程、この鍛錬棒で鍛えて力をつければ、血刀ほどの重い太刀でも十全に扱えるのは道理である。

しかし、雪絵はこの当流においても荒行といって過言ではない鍛錬棒での稽古に、わずかばかりのつまらなさを感じていた。

それは、これ程の――大の大人が持ちあげるだけでも非常に辛い木刀であり、相当の剛の者でも日に五百回や、尋常でない修練で一〇〇〇回といったところを限度とする――過酷な鍛錬を、彼女が容易いと思っているから、というわけでは、当然ない。

春花から、この非常に重い鍛錬棒での素振りは、休憩を挟んで一日に五百を課されていた。その半分をこなして、休憩をいれていても、腕は筋が伸び、筋線維が裂けているような痛みを未だに軽く及ぼしてくる。

雪絵ほどの卓抜した刀技を振るえる者であっても、全身でみた筋力的にいえば、郷の武俠たちのなかでいうと、中の上を抜きんでた程度のレベルだと春花や白峰は見ている。だから、この鍛錬も過度でありながらも、刀技を鍛えるために間違っていない。

またそれとは別に、雪絵はこの鍛錬棒の存在を知らされて、それを利用しての修練を当たり前としている刀技一派があることを知り……刀の遣い手、武俠にはまだまだ剛の者がいることを感じ、身が震え、引き締まった。

だから、この鍛錬法そのモノに不満があるわけではないのだ。

ただ――。

(できれば、あの緋色の太刀を遣わせて稽古できればなあ……って)

そして、更に言うならば、その稽古を春花にみてもらいたい。

ふう、と息を吐き、少しは慣れた手つきで顔の横に持った本のページを片手

第四章 太刀の壱

で繰る雪絵。

この“本を読む”という行為も、ここ半年くらいで彼女に身に付いた習慣だ。

一時期から血刀に触れさせてもらうことが多くなり、雪絵は春花の部屋にもちよくちよく這入らせてもらうようになった。そんなある時に、雪絵の方から本について話を振ったのだ。

「春花さんはよく本を読んでいるけれど、面白いの？」

そこから、じゃあ試しに読んでみれば、と勧められて、雪絵は読み始めてみた。しかし、読んでみたものの、最初は知らない字や意味の解らない単語が頻繁に出てきて、それは読むのが嫌になりそうだった。しかし、そんな時に、左馬ノ介が言ったものである。

「わからないところがあったら、春花さんに訊いてみればいいですよ。きっと喜んで教えてくれますよ」

それはどうだろう？ 春花さんは頭だし、いちいち私の質問に取りあっているのも面倒なんじゃないかな、と雪絵は思いつつも、春花にこの字が解らないのだけれど、と問いかけた。すると、春花は表情がぱっと花開いたように明るくなり、丁寧に、饒舌に、訊いてもいない事まで詳しく話してくれた。そんなこともあり、雪絵はそれ以後もタイミングを見計らってではあるが、度々本を抱いて質問をしに行くようになった。

そうした経緯で、次第に本を読むことが楽しくなった。

(けれど、それは本を読む事の楽しさではなかったのだろうけれどね)

と雪絵は読み解いて苦笑する。

(だって、私には本を読んでいて、楽しいばかりじゃあないもの)

例えば、ミステリー小説と分類される内容の本だ。

主人公が冒険する物語などは、彼らがどうなるかなど、その動向や体験するあれこれから感じる心情に、読んでいてこちらも心が動く。

恋愛の小説は、男性や女性がもう一方の異性にこんなことを感じて、こうい

第四章 太刀の壱

う時間の過ごし方をしたり、結ばれたり、別れたり。こんな風に恋の結末が様々あるのかと漠然と感心する。

しかし、ミステリー小説とえばどうだろう——と雪絵は思う。

(どうにも、気に入らない)

今読んでいるのも、ミステリー小説だ。

後半、事件が解決に向かうにつれて、犯行がどのような手口で行われたのか、そして真犯人を究明していく文章のながれは、気になっていた謎が解き明かされていって、それはそれで心踊るものがあるのは認める。

しかし、だ。

雪絵はミステリー小説——否、人が人を殺す物語を読んで、彼女としての感慨を持つ。

(何でこの手の小説は、こうも自分の咎を隠蔽してまで人を殺そうとするのかな.....)

正しくは、人を殺して咎を犯したことを隠蔽しようとする、だが。

まだその手の本を、ほんの3、4冊くらいを読んだ程度じゃ、こういった作品の深い事情が私には解からないのだろうか？ と首を傾げながらも、文字をゆっくりと目で追い、考える。

そのうっすらと茶色味が差したページを視る視界の外で、鮮烈な光で彩られた陰影豊かな庭の木々や草花が、熱をもった風に、しかしサワサワと涼しげに揺れている。

(人を殺したことを隠蔽するわけは、分からないでもない。それは自らの行いが白日の下にさらされれば——世間に咎が咎と知られば、自分の立場が危ういからだ)

西方などの法治国家は、人の過ちに対して責を問うらしい。それは、刀郷とて人として最低限は、倫理を以って糺される。その結果、咎を犯した者は社会的に死に体になるのを避け、逃れようとするからこそ、こうした小説の犯人は自らが人を殺したことを隠す。それは、西方などではごく当たり前の法と犯罪の追いかっこだ。

そして、本に書かれていることは、現実離れしてはいても、そこに住む人間をなぞったモノであり、延長線上らしいと雪絵にも理解できた。

つまり、それが物語上であれ、時にトリックを用いて、策を弄して咎の贖い——重責から逃れようとする。要するにそれが本当のところだろう、と雪絵は考える。

そこに関して、不満の感想を抱くのだ。

(——正直、馬鹿かと思う)

進退窮まるのならば、その土地の裁きに身を委ねるべきだし、人を殺したことを彼らが怖れ、悔いる心があるのならば、潔く腹を掻っ捌くべきだ。

雪絵は偽りの仮面で人や警察の人間、探偵と接していた犯人の、心の空隙とも歪みともいえる欺瞞について、だから不快感を抱く。

自らの過ちに悔い、恥じるどころなく、その過ちを贖おうという姿勢に欠けた人間の、自らの過ちをなかつたことにしようとする“足掻き”。それが人の多くのスガタだから書に描かれているとしても、それは性根が醜悪で、人として曲がって歪であると雪絵は思う。

(つまりは、自分のしたことから逃げている。怯懦な弱く、醜い人間たちのスガタを描いているともいえるわけよ、ミステリー小説ってやつは)

だから、気に入らない。

人には弱さがある。自分にも、弱いところがる。

そう理解を経ても、その弱さがこんな醜悪な事態を導くところのカタチだとすれば、それはやはり、納得できないし、受け入れることは断固として否定すべきことに思えてくるのだ。

人は弱いから、生き方と心に足りない部分が出て、それが過ちに繋がる。かつての襲ね菊の武俠がそれをよく学びとらせてくれた。そして問題なのは、その状況を招く『弱さ』というモノは、誰しもにあるモノらしくて、自分も例外ではないかもしれない、ということだ。

だからこそ、心を強くもたなければならない。心の芯を強くもたなければならない。

雪絵はそう思う。

自分にとって、誰しにもある弱さとは、共感を生じさせる共通項ではない。厳しく、自らを律する為の反骨と反面的教訓の大基だと思わされるのだ。

だからこそ、大衆が共感する、人の弱さのドラマたるこのミステリー小説を、雪絵は気障りに感じるのだった。

ふん、と鼻で笑い、しかし怒りにまで達せずに、少しは冷静を努めて考える。(もともと、そういう人間がいて、そういう策を弄ってきて、それを解き明かす者がいて……そういう人間模様があるから、こういう物語も成り立っているという側面があるんだろうけれどね)

現実には、こんな込み入った事は起こらないだろうし、皆が各々の領分と利益で動いていて、その切り崩し合いだと、雪絵はこれまで見てきた人間模様を感じる。——と、考えて、じゃあやはりこれは、作りモノのお話なのなら、こうした本は何の役に立つのか？ とも考える。

春花は、本は人の経験の凝縮でもあり、知を分けてもらい自分を豊かにすることだと言った。

そして雪絵は、本は人間の心の動きを描いていることだ、と思うようになっていた。

驚くような事件や、哀しい理由や過去、そして已むに已まれえぬ想いでとった行動。場合によっては在り得ないことだろうと、そこには人間が何かや誰かに対したときに、どう感じ、何を想い、どういったことを言い、どう心の変遷と結論をつけるのかが——その有り様が描かれていると感じ取れた。

(つまり、様々な出来事に対して、人間が何を想い、言い、行動するかに至る、人の心を文章にしている……それに人は、我がことを重ね、共感するから、本という文化は古くから親しまれているんじゃないか……とか思うよ)

だからね、と雪絵は裏切りによって命の危機に立たされる登場人物も、その裏切りを犯した人物の心情も見つめて、本に葉を挟んで、一旦閉じた。

しばらく休憩として読書していたお蔭で、躰は休まり、もとより頑強な躰は腕の方も幾分ましに快復している。

広間での夕餉時前に湯を浴びる時間を加味して、残りの半分の素振りを済ませようと身を起こす。片手で重い鍛錬棒を引きずり（全長が並の刀よりよっぽど長いので、油断すると地に擦るのだ）庭の芝生の上に立ち、ゆっくりと振り棒を正眼に構える。

相変わらず葉月の太陽は容赦のない照り付けで、袖まくりして露出した両腕の肌が一気にひりつく。

雪絵は蝉の鳴き声に負けじと「ふっ」と気を発すると、重い振り棒を、腹から力を込めて振り下ろした。

どうにも気に入らない。

気に入らないミステリーの本でも、それでも結末まで読んでから……この登場人物たちの心の顛末をちゃんと見届けてから、何かを言おうと思う雪絵だったが――しかし。

春花がこの数か月、どうも忙しいらしく、所用と称して出張していることが多い。夜半の帰邸や朝帰りなども多く、夕餉の席にいないことも週に何度かあり……いい加減、そのことに関して不満を言いたくなるのだ。

刀技の鍛錬は良い。

本を読むのも有意義だ。

けれど、春花と共に過ごせる時間が短い日々は、どうにも気に入らない。

空はこんなに青いのに。

太陽が、向日葵のように輝いているのに。憎らしいくらい。裏切っているみたいに輝いていて――春花の笑顔が重なる気もして、それで尚更気に入らない想いがふつつつと沸いてしまう。

それくらい、ここのところの雪絵の心と、輝いているモノとは伴わなかった。

第四章 太刀の壱

いいかな、と雪絵は、洗濯をして昼の強い日差しで乾いた襦袢や下着、着物、洋服といった衣類を、慎重な手つきで畳みながら言った。

離れの一室。夕餉の片付けも済み、一日の家事ののこりとして、日中の陽光で干された衣類をまとめてしまう、のんびりとした時間。小さな灯りと夏の夜の星月に照らされて、虫の音が彩り、まだいくらか熱を帯びた空気の中、静かに問いかけてきた義姉に、左馬ノ介はさわやかに顔を向ける。

「なんですか？ 俺に答えられることだといんですが」

「うん、あのね……つばきさんとひなぎくさんも、ついでだから、出来れば教えて欲しいんだけど……」

「うん？ 何、雪ちゃん」

「なにになに～、お夜食には早いですよ～」

にんまりと細い目で笑むひなぎくに、ペしりと平手の峰打ちをするつばき。そして二人は作業の手を止めずに左馬ノ介同様に顔を向ける。

「あのね……この前に、仁美から聞かされたんだけど……」

左馬ノ介、つばき、ひなぎくは活発そうな仁美の顔を思い浮かべる。

「仁美さんが何か？」

「うん。あの娘、刀郷にいる時は境界線地帯の宿場をよく使っているから、青刃のシマの武侠に護衛してもらうことがあるんだって」

「はい。あの辺は、やや物騒ですからね。清家の組の令嬢ともなると、それも必然でしょう」

「で、春頃に室泉……という人と出逢ったそうなんだよ」

「はあ、仁美さんがですか」

「うん、でね、仁美はその人のことを楽しそうに私に話すんだけど、こういう時、私はどういう風に返したらいいと思う？」

「はい？ ……どう、とは……？」

「喜んであげた方がいいのかな……？ なんか期待に応えられないで、あの娘が不満そうだったんだけど……それが考えても全然わからなくて」

ん……、と左馬ノ介は眉間に皺を寄せて、人差し指でそこを叩く仕草をする。

「えっ?! それってもしかして、清家のお嬢の恋の話ですか?!」

「え〜、そうじゃないかな〜やっぱり〜」

「そう考えられますけれど、どうなんですかね、姉さん」

三人の反応と視線を受けて、雪絵はこくりと頷く。

「どうも、惚れた人がいるようなんだよね、これ。けど、友人がそういう話をしてきても、どう言ったらいいかわからない……」

雪絵としても散々考えはしたのだろう——そのうえで相談してきた悩み抜いた疲労がじわりと滲む顔だった。薄明かりの中、頷いた顔をあげずに、俯いたままその顔に影をおとしている。

そんな雪絵を視て、左馬ノ介は、手にした洗濯モノに虫食い穴でも空いていたかのように困った顔をしてしまう。

沈黙する両者の脇から、つばきが身を乗り出してきた。その顔が、義姉弟とは打って変わって色鮮やかに花開いていることに、左馬ノ介はぎよっとした。

「ふふふ、あの勝気なお嬢の恋話ですか。興味ありますね。その室泉というのは、イイ男なんですか？」

「つばきちゃん〜、そんな話じゃないんじゃない〜」

珍しくひなぎくのほうが宥める役に回るも気にせず、「いいじゃない」と口を弧にしてつばきは乾いた組員の着物を持つ手に力を込める。

「ああ、それは、うん……私は面識がないから、顔カチは知らないけれど、仁美がいうにはハンサムなんだとか」

つばきがほ一ほ一と口元に着物を当て、頬を上気させる。その横で、左馬ノ介は場の空気に反して常識的なセリフを口にした。

「しかし姉さん。姉さんが困惑していて、相談してくるのは別に俺はいいんですが、本来他人のそういう話はですね、あまり周囲に広めない方がいいものですよ」

「そうかな？」

「ええ……そうですね。例えば、姉さんが仁美さんの立場だった場合を想像してみてください。自分の知らないところで、自分が好きな人のこと……あの人

第四章 太刀の壱

が好きだ、という話をされるのって、少し気恥ずかしいものはありませんか？」

身振り手振りで例えを出す左馬ノ介に、雪絵はわずかの間——何故そんなに大振りなんだろう。と思いつつも——その言葉を咀嚼する。そして、白峰のように顎に手をあてて、首を傾げる。

「そうかな？」

「そうですって！」

半畳をいれる左馬ノ介に、しかしつばきはキラキラした目をして、熱のこもった声で言う。

「そうかもしれませんがけれど、女子はこういう話が大好きなんですよ、織田さん！　　というか、雪ちゃん、もっとクワシク！」

「つばきちゃんが仕事の時の三倍はやる気に満ちています～」

「いや、つばきさん、仁美さんのことを考えてですね。姉さんも後で仁美さんが怒ったらどうするんです」

荒ぶる若い女子への対応に困る若い教師のように、左馬ノ介は瞼をふせる。

そんな彼の手を、つばきは力強くとると、

「大丈夫！　織田さん、恋愛って包容力だから！　否定よりも肯定を。相手のすべてを受けとめる覚悟をした女の子は、そんな些細なことは気にならないんですよ！」

「は、……はあ、」

「相手のすべてを受けとめるって……技的な？」

冷や汗を浮かべてひいている左馬ノ介の横から、雪絵が真面目な顔で言う。それに対してつばきは顔を上げて、ふふん、と笑った。

「そうだと言えるけれど、そうじゃないんだよ。雪ちゃんはまだお子様だね」

「む、子供じゃない」

「えー、本当かなーっ」

「つばきちゃんは耳年増なだけだから、気にしないでね～」

うっさい！　とひなぎくに再度平手峰打ちを喰らわせるつばき。

ばたばたと騒いでいると、廊下から福珠がやってきて、パンパンと手を叩い

た。

「少し騒がしいですよ。今夜は離れに大姐さまがいらっしゃらないとはいえ、静かになさい」

「はい」「すみません～」

正座して居直る女中二人の様子に、この件はこれでうやむやに片がつきそうだが、姉さんには後から自分が何かアドバイスしよう、と左馬ノ介は息をつく。

案の定、上司を前に、静々と仕事を再開するつばきたちだったが、雪絵は福珠の方をみて口を開く。

「春花さん、今夜もまた、どこか出ているの……？」

雪絵のそのセリフに、左馬ノ介はピクリと眉を動かす。何やらまた不穏な場になりそうな気配を聴く察したのだった。

「姉さん、それは……」

そこで、先回りをして話の方向を変えようと左馬ノ介は試みる。しかし――。「大姐さまもよいお歳ですからねえ、お嬢さまが来てからは、だいぶん大人しくなったと思っていたのですが……」

「福珠さん、その話は……」

「あら、これはいけない」

と、左馬ノ介と視線を交わして、福珠は口許に手を当てた。

そうして、福珠はつばきとひなぎくが畳み終えた洗濯モノを籠にまとめられるだけまとめると、雪絵に軽く頭をさげて部屋を出ていった。

困惑気味の雪絵が、左馬ノ介の方を視ると、彼は平然と笑って返すだけで、何も言わなかった。

そんな二人の横から、立ち上がったつばきが籠を抱えて言った。

「雪ちゃん、良かったら手伝ってよ。これから本邸の方の男衆に、洗濯モノを渡していくから」

「え……？」

つばきを視ると、彼女は片目を閉じてみせる。それで、詳しくは分からないが、何か意味があって自分を誘っているのだと雪絵も気付く。うん、と頷いて

第四章 太刀の壱

立ち上がる。

「いや、俺が行きますよ。姉さんは休んでいてください」

「じゃ、織田さんは私と行こうか～、手伝ってね～」

「えっ」

左馬ノ介とつばきが同時に、異なった発音で声をあげた。そして、つばきは僅かの間歯がゆそうに口を引き結んだが、やがて、

「行こ、雪ちゃん」

と、廊下に出た。

「じゃ、左馬ノ介」

雪絵もその後が続いて出ていく。

後には、茫然とする左馬ノ介が、ニコニコと笑むひなぎくと洗濯籠を前に立ちすくんでいた。

「もう、織田さんは意外とお堅いんだからなあ」

「そうかな。どんなところが？」

本邸の廊下を、籠を腰の前に抱えて歩くつばきは、ぷりぷりして言った。

「女子の楽しみを解さないところとかかな～、今の場合。ま、それも過保護に行きつくってことなんだろうけれど」

「左馬ノ介の過保護っぷりは、昔からかな。あれは左ノの癖みたいなモノだよ」

ふ～、と重く息を吐くつばきに、「で？」と雪絵は話を振る。

「何か、聞かせてくれるのかな？」

「ふふ、そうだね。福珠さんも織田さんも、雪ちゃんに話したがるじゃないけれど、ちょっとした噂話をね」

「噂話？」

「うん、そう。私も人から聞いた話だから、確かなことは言えないんだけど、組の中じゃあ、かなり前から当たり前に知られていることだし、信憑性は高い話だと思うの」

男衆の部屋の開け放たれた襖を軽くたたき、相手がいてもいなくても――

第四章 太刀の壱

雪絵からみても無遠慮に――何をしても構わずに渡すべきモノを置いてそしらぬ顔で出てくるつばき。

雪絵はその熟練の動きを、部屋の前で籠を抱えて待っている。部屋から男の組員が、雪絵を認めて「珍しい顔だ」と笑いかけた。左ノ字と一緒にじゃないんだな、という声に、つばきが、「はいはい、別行動中ですよー」とあしらってさっさと次に足を向けた。

部屋から部屋の移動の合間合間に、二人は話をする。

「聞いて気を悪くしたら、出来れば忘れてほしいんだけどね、どうも春花姐さまはね、交友関係が派手らしいんだよ」

「派手？ 交友関係が？」

それは、多くの傘下の組々の頭たちや幹部たちと会合の席を設けているから、薄々雪絵もそう感じてはいたが.....しかし、総会の席に並ぶことをまたし始めた雪絵から見ても、“派手に遊んでいる”という訳ではないと思われるのだが――と、そう言う雪絵の口ぶりに、つばきはちっちっち、と舌を鳴らす。

「雪ちゃん、交友関係っていうのは、この場合そうじゃないよ。そうだったら、別に福珠さんも包み隠すような態度をとらないって」

「それはそうかも。じゃあ、なんなのだろう？」

一旦足を止めて、もう、とつばきは嘆息して雪絵を半眼で視る。雪絵が訳が分からずにいると、つばきは言う。

「これがほら、さっきの雪ちゃんの話と繋がるんだよ。要するに、恋の話して訳よ」

「恋の.....、交友関係.....？」

自分でそう口にして、一瞬「春花さんが？」と疑問に思うのものの、先程の福珠の『自分が来てからだいぶ大人しくなった』という言葉や、春花との会話がすこしずつ繋がってくる。

「あ、思い当たる節ある？」

「うん.....、確かなことは言えないけれど、自分は惚れっぽって、言ってい

第四章 太刀の壱

たことがあったし、あの西方の外交官とか、なんか男の知り合いと仲良く話していることが結構あるし……」

頭の中で何やら湧き上がるモノを感じて、卵型の球体が回転するような不規則な思考をしだす雪絵。抱えていた籠をごとりと板床に落とした。

「え？ つまり？ 今夜もそういう男と逢ったりしているかもしれない……ってこと？」

「まー、十中八九そうだろうっていう、たぶんの話だねー」

つばきの肯定に、どうも思考がぐるぐるとし出して、どこに着地していいか分からなくなってきた雪絵は、取り敢えずと口を開く。

「で、でも、春花さん、そんな男と派手に付き合っているわけじゃないんじゃない?!」

「んん？ それはそうだと思うけれど。その辺は、春花姐さまと一緒にいる時間の長い雪ちゃんの方が詳しいのかな。例えば？」

「えっと……、そう！ 以前、品川の方の総会で、月艾組の若頭がいてね、私の目から見てもそれなりの良い顔立ちをした男だったけれど、春花さんは彼を歯牙にもかけなかったんだよ」

「ふーん、それはどうして相手にしていなかったかとか、聞いた？」

「うん。なんでも、あの若頭は同じ組の者を自分たちを利するためのコマとされているところがあるんだって。それを月艾組の親分さんは、成長して欲しくてその男を若頭にしたそうなんだけれど」

「ああ、頭は切れるけれど、人間に興味なさそうな男は、私も相手にしないかも」

「そんなもの？ というか、分かるの？ 全部話していないのに」

腕を組んだり顔のつばきが、うんうんと頷く。

雪絵は 「そっかあ」 と小さくつぶやいた。

「……それでね、だから春花さん、あの男は今は私のお相手にはならないわね、って言っていたんだよね。私もその話を聞いてしばらくしてから、よくよく納得できたんだけれどね」

第四章 太刀の壱

つまりね、と雪絵は続ける。

「つまり春花さんは、男との関係が盛んでも、適当に付き合っているわけじゃないと思うんだよ！」

「そうだね」

あっさりと、つばきは頷く。その温度の低さに、雪絵は自分の内で高まっていた熱が急に恥ずかしくなって、冷静になってきた。

そういえば、春花の付き合いが派手と言っても、つばきは問題視している風ではなかった。

「ま、つまり、昔からとかそういう男との関係が色々あるって組員に知られている春花姐さまだけれど、あの人のしっかりしているところを考えれば、それほど気にすることもないと思うのは.....私だけじゃなくて、結構組のみんなが思ってることじゃないかな」

「そうだよね.....。じゃあ、左馬ノ介や福珠さんは、何ではっきりそういうことを話さないの？ 心配ないなら、別に話してもいいんじゃないの？」

「うーん、そこはね、あんまり開けっ広げにすることじゃない話題なんだよ... ..男女の仲って、“秘め事” っていうじゃん。あ、そこ行くと、織田さんは正しいのか.....ちえっ」

口を尖らせるつばきだった。

雪絵はふむふむと今の話を記憶している。

「.....そうか、となると、仁美のことも、あの子の器量を信じて、見守るくらいでいいのかな」

身を屈めて、籠を手にする雪絵に、つばきも同様にして前を向く。

「うーん、でもそれはあれじゃないかな。心配になる気持ちがあるんだったら、雪ちゃんの目でそいつの顔を拝んで、清家のお嬢に相応しいかどうか、いっちょ見極めるのもありなんじゃないかな」

「ふうん。私が仁美の恋のお相手を見極める、か.....」

二人は歩きながら顔を見合わせる。

「面白そうでしょ」

第四章 太刀の壱

「うん、恋話は女子の華だね」

宵闇の中、廊下に行く雪絵とつばきは、やがて同じく仕事を済ませた左馬ノ介とひなぎくと合流する。そして、ひなぎくとつばきは手を振り合い、雪絵と左馬ノ介はそれぞれ違った味のある顔をしていた。

.....続く。